

忘年の友－結城哲彦さんへ

結城さん、あなたと出会ったのは2010年の秋、私が日本に来たばかりの時でした。

初めてなので少し早めに到着つもりで早々8号館4階のゼミ室へ向かいました。そのとき、ひとりの中国人留学生の先輩とひとりの重そうなりユックサクを背負っている老人がゼミ室のドアの外で話をしていました。まさか伝説の高林先生かと思いつつ、ふと緊張感が高まってきました。先生に何を話したらいいか困っているところ、「こんにちは、蔡さんですか？」その老人から優しい声をかけられました。私は、「はい、中国から蔡さんです！」と自信満々答えました……その時、結城さん、笑ったのでしょうか。恐らく、あなたが考えていたのは、せっかく中国から日本に来たので、日本の法律を勉強するだけではなく、日本語の使い方や日本文化への理解も大事だよということでしょうか。

それから、結城さん、あなたはボランティアで外国人特別履修生であった私の日本語の“家庭教師”として、ご自分の貴重な研究時間を割きながら、熱心に日本語を教えてくださいましたよね。その上、「紹介してあげるから、もっと日本人のお友たちを作ろう。まず日本人の仲間と富士山を登って見たらどうだ。論文執筆も、富士登山と同じもんだから」と言って、早速お嫁さんの麻美さんを通じ

て富士登山のツアーまで手配してくださいました。その旅の詳細はお伝えしていませんでしたが、登山中、我々は七合目近くの山小屋で一時休むことを余儀なくされました。高山帯の厳しい寒さに加わり、あいにくの突風と大雨で、ある意味危険な状況でした。しかし、それを乗り越えた翌朝、我々はようやく頂上までたどり着き、神秘的なご来光の瞬間を落ち着いて見つめることができました。数年たった今もその幻のような美しい、ただ美しい光景が脳裏に焼き付いています。

その経験は、その後の研究の過程で、高林先生から「今の論文は何合目ですか」と聞かれる度によみがえり、あとどれほどの努力が必要なのかを理解することにつながったと言えます。今振り返ってみれば、結城さん、これも、あなたの当初の狙いだったのでしょうか。

2012年の春、結城さんと私は、二人揃って無事に博士後期課程に入りました。博士後期課程の三年間、生活の面では、あなたやご家族から数え切れないほどの温かいおもてなしを受けましたね。「学問は厳しいものだが、日本の留学生活をもっと楽しもう」と励ましてくれながら、奥様の美代さんと三人で越後湯沢温泉旅行や浅草からお台場往復の船の旅等々を企画してくれました。私にとって、その全ては生まれて始めての日本文化の体験でした。これらは、まるで昨日のできことのように。そして、一生忘れられない幸せのひと時となりました。

た。本当に有難うございました。

研究や勉強の面でも、あなたは私をととても驚かせました。大手町の定例知財勉強会、南青山3丁目の講義などは言うまでもなく、ゼミで私が発表する際も、博論のテーマが全然違う分野（結城さんは営業秘密、蔡は技術標準と特許）なのに、より有益なアドバイスをくださるために、わざわざ私の分野の研究書を買って読んだうえで、様々な視点から助言や指導を下さいました。そして、アドバイスをくださる度に、いつもご自身が収集して整理した研究資料等を丁寧に装丁して手渡してくれました。それらが、三年間の研究生活を支え続けてくれる心の糧になったことも、あなたの企画通りのことなののでしょうか。

.....

なぜあなたがいつも熱心に人を助けるかと疑問に思ったことがあります。その答えを見つけるために、あなたが誇りにしていたご出身校である同志社大学の教育理念を調べてみました。やはり、同志社教育の原点は「良心」であり、そうか結城さんは良心を体現していたのだと納得できました。私は同志社大学で教育を受けたことはありませんが、結城さんの人生の過ごし方から、「良心」以上のことを身を以て感触することができました。結城さんご自身がまさに同志社大学の教育の賜物であると思っています。いつも同志社を誇りに思っていたあなたは、今、同志社の誇りになったことに間違いありません。

2019年6月17日に、あなた宛に送り出した手紙をまだ読んでないでしょうか。つい先日ご著書を頂いたお礼のメッセージなのですが、奥様を連れて是非一度豊橋へ遊びに来てくれるとお誘いも含んだものでした。

結城さん、その約束をどうなるのでしょうか。

心が痛くて悔しいです。

もっと早めに連絡したらよかったと後悔しています。

一つの漢詩を借りて今の気持ちを表れ、心からご冥福をお祈り申し上げます。

夢微之

白居易（唐）

夜來攜手夢同遊，晨起盈巾淚莫收。

漳浦老身三度病，咸陽宿草八回秋。

君埋泉下泥銷骨，我寄人間雪滿頭。

阿衛韓郎相次去，夜臺茫昧得知不？

2019年7月31日